

## 近世三田藩史料に現れるフランス語関係の記述について

小山 俊 輔

摂津の国の最北、丹波及び播磨との国境に位置する三田領は、旧有馬郡に属し、九鬼家三万六千石が、寛永十年以来明治維新までの二百三十年余の間支配した。近年三田市の郷土史家である高田義久氏が、三田学園図書館所蔵の古文書をはじめ、旧家に残る様々な古文書を閲覧解説されて、『九鬼家年譜』<sup>1)</sup>、『三田藩士族』<sup>2)</sup>を自費出版され、同時に後者をホームページ上で公開されるなど、活発に藩史の実証的な掘り起こしを試みられている。

筆者は偶然『九鬼家年譜』を入手し、そこにフランス語関係の記述が一度ならず出現することに刮目した。九鬼家は、幕末から明治にかけて大変ユニークな政策を採った藩である。それは類を見ないほど過激な洋化策で、小藩ながら、戊申戦争時には完全に小銃隊によって編成された洋式軍を完備し、藩士を教師とした領民のための学校を各地に組織していた。その洋化策を強引に推進したのが、白州次郎の祖父の白州退蔵である。藩内では英学が奨励され、その教授にあたったのが、日本初の自然科学全書である『気海観瀾広義』の著者である川本幸民であった。藩医であった川本幸民は藩命で蘭学を修めた後、事情あって藩を離れ島津斉彬のもとで薩摩藩の近代化を推進する有力プレーンとなり、さらに英学・理化学の知識を買われ幕府の蛮書調所に採用され幕臣となっている。銀版写真の実用化、マッチ、ビールの製造、砂糖の精製などの実績も残している。一介の儒学者から執政となった白州退蔵は、幸民と連絡を取り合いながら強力に藩の近代化を推進した。退蔵の手足となって働いた小者出身の小寺泰次郎は、後に神戸市長を務め、その邸宅は相樂園として今に残されている。藩主隆義は維新と同時に一藩帰農を願い出、華族の位を返上し、神戸で「志摩三商会」を設立、薬品類の輸入に当たると同時に、畜産や製油に事業を広げた。彼は福沢諭吉に私淑し、明治二年に有馬温泉を訪れた諭吉は三田に招かれ、隆義と時勢を論じている。なお駐米公使や伊藤博文の文化顧問役を務め、岡倉天心と複雑な経緯のあった九鬼隆一は、三田藩士の家から分家である綾部九鬼家の家老の家に養子に入り、自らの政治力によって男爵となった人物である。当時から「九鬼男爵」として隆義と混同されることも多かつたらしい。哲学者の九鬼周造は、その四男である。

このように幕末から、西洋文明に傾倒する人物を輩出してきた三田藩であるが、これまでその欧化主義は、川本幸民の蘭学や英学の文脈で語られてきた。しかし高田氏の史料発掘により、それ以前になぜかフランス学が藩内で研究されていた可能性のあることが明らかになってきた。これは日仏文化交流に関する新しい事実である。今回論文を執筆するに当たり、高田氏に連絡を取り、フランス関係の文書の写真を掲載できるようお願いしたが、あいにく三田市は新しい歴史資料館を整備中で、資料が移動していても見つからないとのことであった。この交渉の間印象的であったのは、高田氏がフランス関係の記述の重要性に全く気づいておられないことであ

る。氏は余念なく、忠実に文書の文面を起こされたまでのことなのだ。

まず、高田氏作成の藩史資料から、フランス関係の事項を抜き出して、検討を加えることにしたい。お断りしておかなければならないが、筆者はボードレールやヴェルレーヌを専門とする者であり、日本近世史は全くの素人である。高田氏の本に出会ってから、古文書を読む練習を始めたが、平仮名はともかく、漢字の崩し字となると皆目歯が立たない。結局容易に入手可能な、活字化された文書をあれこれ検討して、論を進めざるをえなかった。そのことをご承知の上で、お付き合い願いたい。

なお原資料以外は筆者の思考であり、独り合点や推論の暴走は一切高田氏の関知するところでないことを明記しておく。

## 第一章 資料の検討

### ①文政九年（1826）九月四日江戸留守居役より勘定奉行に提出の書状<sup>4)</sup>

御勘定奉行より御呼出しに付、留守居役赤林小源治御城中ノ口へ出候処、式部卿様御領地和泉国大鳥郡・和泉郡海岸へ異国船渡来の節、御代官石原清左衛門殿より案内次第人数差出し候様申すべき旨御達し有り。

私儀兼而泉州大鳥郡警衛之儀被仰付、其節差上候書付之通精々用意仕候、然る処右大鳥郡警衛之節、万一大坂騒立候得は、在所江の通路相絶可申困難之儀茂可及御坐候哉と甚心配仕候、且又大坂要枢之地に御坐候得は、猶更嚴重之御固め可及御坐候、附而は夷賊共丹波地より直々京都江出候事も不破凶儀と奉存候、私在所表の儀は其衛路に当り候得は、其節に至り大鳥郡警衛旁力を分れ勢い均かう（ら）ず小勢之処双方共如何と心配仕候、依之撰州八部郡兵庫より北折之路天王峠、同州菟原郡御影より北折之路大利より平と申右兩路之固めとして撰州有馬郡唐櫃、同州八部郡谷上辺江出張仕候様、御振替に被仰付被下候得は逆も行届け候儀は無御坐候とも、少者御役にも相立可申哉と奉存候、此儀は兼而茂奉願度罷在候処、外国共近々大坂江入津上京の趣御坐候由、佛国新聞紙に御坐候故取留候儀には為御坐間敷候得共、不取放（敢）此段奉願上候 以上

### 現代語訳

私どもは兼ねて和泉の国の大鳥郡を警衛するように仰せつかり、その際に差し上げました書類通りに精一杯準備しております。しかるにその大鳥郡を守っているときに、万一大坂に騒動が起りました場合には、三田への道が遮られる可能性もあり苦境に陥るやもしれないと心配です。その上大坂は要となる大事な場所ですから、なおさら嚴重な防衛が必要かと存じます。つきましては、異人たちが丹波街道から直接に京都へ侵入することもあり得ると想定されます。そうなれば私どもの領地はその攻撃に直面する位置にありますから、そういう場合に、大鳥郡警衛にも戦力を割き、二つ不均等な小勢で立ち向かってもどうなるものかと心配しています。そのようなわけで、撰津の国八部郡兵庫より北上する天王峠の道、同じく菟原郡御影より北上して大利から平へと向かう道の警戒に当たるために、撰津の国有馬郡の唐櫃、同じく八部郡の谷上あたりへ出動と

割り当てを変更していただきましたら、万全とは行かないまでも、少しはお役に立てるかと思っております。このことは前々からお願いしておりますが、外国が近々大阪湾に侵入する計画があると仏国新聞紙に書いてありますから、どうしてもというわけではありませんが、とりあえずお願い申し上げます。

できる範囲で、語句に考証を加えてみる。

#### 式部卿

御三卿の一人、清水斉明のこと。文政三年に従三位権中納言式部卿に任じられており、大鳥村などに所領を持っていた。

#### 天王峠

神戸市兵庫区の平野界限から有馬街道を北上したところ。八部郡は現在の神戸市西部に当たる。

#### 大利から平

未詳。御影から北上するのであれば、今の「石切道」か。菟原郡は、現在の神戸市東部から芦屋にかけて。

#### 唐櫃

現在の神戸電鉄有馬口駅、神鉄六甲駅付近。六甲山を越えて有野川の谷筋に出る地点。西に向かえば有馬温泉、北上して三田から丹波に通じる。

#### 谷上

同じく神戸電鉄谷上駅付近。六甲山を越えて山田川の谷筋に出る地点。東に向かえば播磨から丹波を通り京都に向かう。このコースは源義経のノ谷攻めのコースである。

#### この儀は兼而茂奉願度罷在候処

文化六年（1809）に次の記述がある。<sup>5)</sup>

九月八日和州五条御代官池田仙九郎様より飛脚を以て、去る三日の日付にて書状来り候は、池田仙九郎様御支配撰州八部郡・菟原郡浦付村々へ万一魯西亜船渡来致し候節、手当の儀御置き申すべき旨土井大炊頭様仰せ渡され候段、御勘定奉行より申し渡しこれ有る内、此上自然渡来致し候えば御通達これ有るべき候間、其節人数差出し候様申し来る、もちろん九鬼和泉守殿役人中と申す宛名書きにて飛札来り候。

九月十三日

これに依り侍大将九鬼数馬、鉄砲組者頭小橋十郎平、野津甚右衛門、御目付村山主鈴、戦士として給人中十五人それぞれ役付これ有り、無足のもの五人御手当仰付かる。

文化元年から、しつこく日本近海に出没したロシアのレザノフ艦隊に対して、幕府が神経質になっていたことが分かる。ロシア船が大阪湾に来た場合、八部郡と菟原郡の防衛に当たれという老中の命令が、勘定奉行から五条代官経由で三田の国元に伝えられ、早速国元で部隊編成を行った様子が記されている。九鬼数馬は四人いる家老格の一人、小橋家は二百石で町奉行などを出している。それにしても将校の数とはいえ、十五人とは少ない。天保四年の知行録では、藩士は七十人程度で、医者や江戸留守居役まで入れての数であるから、実際に戦闘能力を持った人員とな

るとこれくらい心細いものにならざるをえなかったのだろう。弘化二年の惣席録では二百人の名が記されている。ただしこちらには、茶道役や料理人まで入っている。もちろんいざとなれば足軽小者まで入るから、人数は膨れ上がるだろう。ペリー来航の際浦賀に出動したメンバーは、名のある侍だけで五十名、ほぼ同数の足軽が付いている。安政四年の大坂湾警備の動員が二百七十六人、これがフルメンバーであろう。『江戸幕藩大名家事典』（原書房）には、精隆時代の武士の人数、卒をのぞいて六百六十七人とある。いかがなものか。

また文政六年（1823）に次の記述がある。<sup>6)</sup>

九月 撰津国八部郡・菟原郡の内の湾岸に若し異国船参り候節は、固め御頼り御坐候に付、九鬼数馬初め十四人罷り向うべく候様仰付けられ、道中押しの御書付け迄下しに成られ候共、異国船参り申さず候。

前の記事から十四年たっているが、部隊編成はほぼ同じであることがわかる。この異国と戦うために編成された部隊は、その目的のために何かの準備をする時間は十分あったことになる。たとえば敵国語を学び、兵法を研究するとか……残念ながらそういう記述は残っていないのだが。

ここから推定できるのは、レザノフ事件で大阪湾の海防に関心を持った幕府が、江戸に参勤していた九鬼隆国に相談の上、待機体制を作っていたことである。幕府の意向を汲んで、隆国が積極的に引き受けたと考えられる。そして九鬼家からの申し出により、持ち場は八部郡、菟原郡に割り当てられていた。ところが文政九年に改めて、和泉の大鳥郡にある清水家の所領を防衛することを命じられたため、ただでも少ない家士を半分に分け、土地勘もない他国にある責任重大な天領を預かり、肝心の所領の守りは手薄になり、何もいいことはないと言配置換えを願い出たものであろう。

赤林の文書からは、願い出たら変えてもらえるという自信のようなものもうかがえる。より近くの岸和田や河内狭山ではなく、わざわざ撰津国の北端にある九鬼家に、御三卿の一つである清水家の所領の防衛を任せようとしたことは、幕府が九鬼家を評価し頼りにしていた証拠ではないだろうか。

#### 仏国

通常この時代は「仏郎察」と表記されている。中国語起源か。長英は「仏郎西」という混交的な表記をしている。

一方、「仏」表記の例としては、頼山陽に「仏郎王歌」（文政元年（1818））があり、『和仏蘭対訳語林』という書の存在が有名である。これは宮永孝『日本史の中のフランス語』に写真入りで紹介されていて、「佛」の字が確認できる<sup>7)</sup>（その書名の書き込み年代は確かめる必要があるが）。詩も語林も、いずれも1810年代後半の成立と見られる。中国語でスペイン・ポルトガルを意味する「仏郎機」「仏狼機」との混乱を避けたものか。「仏」という表記の例としては、岩下哲典『江戸のナポレオン伝説』に『仏蕨新聞』という書物の存在が紹介されている<sup>8)</sup>。面白いのは、「仏」表記は、二文字であること、そして「仏」表記の書物が正体不明であることだ。『和仏蘭対訳語林』は、『仏郎察辞範』と同時に、長崎通事の本木庄左衛門たちの手で成立したと考えられているが、『辞範』が一旦刊本となり、その後世に出ることなく終わったと思われるのに対して、『語林』は草

稿のまま放置されたい。その草稿本には、執筆者も年代も記されておらず、詳しいことは分からないようである。『新聞』のほうは、「元周」という筆者の名が記されているが、この人物については未詳であるようだ。年代に関しては、文政九年（1826）に長崎オランダ商館館長スチュールレルが江戸を訪れたときの聞き書きであるから、だいたいその直後であろう。文政九年は三田藩の書状の年である。<sup>9)</sup>『訳語林』『新聞』ともにその由来が不明なのが、かえって興味深い。

今のところ、頼山陽の詩が確認できる「仏」表記の早い例になる。なぜ二文字なのか。朗詠詩としての口調の問題があるだろう。そして山陽はロシア遠征に従軍したオランダ人医師から直接ナポレオンの話を聞き、古今の英雄として感激したわけだから、尊敬の気持ちを込めて「てへん」を「にんべん」に取り替え、伝統的に夷蛮の国名である三文字表記を改めて、「日本」「朝鮮」と同じ二文字表記にしたのではなかろうか。そうすると「弘郎機」と「仏郎」というふうになり、区別がしやすいことがわかって、長崎通事も一文字で表す「和仏蘭」では「仏」字を採用したのではないかと空想するのだが、専門家のご意見はいかに。

オランダのことを「蘭国」と書く例は、調べた範囲では見つからなかった。朝鮮のことを「朝国」と表記しないのと同じであろう。しかも「仏国」というと、「仏の国」という古くからの意味があるから、ますます異様な表記である。しかしまったくありえないかというところでもない。まず、この書状の執筆者である赤林小源治は蘭学者ではない。赤林家は、九鬼家中では数少ない、有馬郡での現地採用の家であり、間もなく財務担当（錢奉行）として登用されている。<sup>10)</sup>まずは優秀な地方公務員という家柄である。当時は百石取りで、九鬼家の東京支店次長に当たろう。彼は異国の名前を、正確に表記するよう心がける必要はない。幕府のお偉方を相手に、作戦変更を求めることが書状の目的であり、しかも同じような請願を以前から何度も繰り返しているようだ。その中で相手方も周知の略号として、「仏国」と表記した可能性がある。もしも『仏菴新聞』が関係する場合、この「菴」という字の希少性も関わってくるだろう。請願の根拠を述べ、さらに念を押すように最後に「蛇足ながら」と付け加えているように読める部分なら、なおさら符丁の可能性が高いのではあるまいか。

## 新聞

「風聞」という意味で古くから使われているが、「ニューズペーパー」という意味では、文久二年の「官版バタビヤ新聞」が最初といわれる。「新聞紙」の用例は慶応年間からあるが、一般化したのは明治二十年代といわれている（『日本国語大辞典』（小学館））。だが、上の『仏菴新聞』である可能性がある。この書物は文政九年の聞き書きを元にしてから、時間的に整合する。しかし文書の実物も、書物も遺憾ながら未見であり、判定できない。

渡辺華山の『外国事情書』（1839）に次の記述がある。

右ノ通、西夷共深忍積思ヲ以テ、種々様々ノ規画ヲ致候事、筆紙難尽、其一班ヲ奉申上候。前書ノ通、欧邏巴諸国一地球中ニ押領ノ地有之、其諸地ニ皆風説板行署ヲ設フケ、七日メニ発行仕、コレヲ「ダグエーンウエーキ ブラーデン」と申候。「ダグエーンウエーキ」ハ一七曜日ト申事、「ブラーデン」ハ一片紙ト申事、即日々ノ風説書ニ御座候。<sup>11)</sup>

植民地からの週報のことを説明するのに、これほど苦労している。「新聞紙」という単語が、華山のこの件から十三年前に使われたとは考えにくい。しかし一方で、杉本つとむが指摘していることだが、現在の国語辞典は、蘭学の書物に現れる翻訳語の用例を全く無視している。<sup>12)</sup>意外に

古い用例があるかもしれないことに留意する必要がある。（追記：木村芥舟の『奉使米利堅紀行』に「新聞紙彫刻」という表現を発見した。「バタバヤ新聞」より2年早い。）

②天保十四年（1843）三月軍事演習の記録（原資料は九鬼家文書中にある由である<sup>13)</sup>）

郡奉行兼寺社奉行であった岩根寛三郎が侍大将となり、上野ヶ原でフランス語の号令をかけて調練を実施した。

元治から慶応年間に幕府がフランス陸軍将校を招聘し、フランス式軍隊の養成を企てたことは周知である。その二十年以上前に、ブッキッシュな知識をかき集めてフランス式の演習を実施していたのが本当ならば、驚くべき事実となる。たとえ高校の一クラス分の人数しか兵士がいなかったとしても。

天保十二年に、あの高島秋帆による徳丸ヶ原の大演習が行われ、西洋砲術の威力が明らかになる。そこで早速高島流の導入を図ったのが、薩摩、肥前などの雄藩、佐倉、田原などの先進的な小大名たちである。だがその中でも、この「フランス語で号令」と言う記事は異色である。江川太郎左衛門が、調練でのオランダ語による号令があまりに煩雑なので、「前にならえ」などの号令を発明したこと著名である。

その江川は、天保十三年、佐久間象山を相手に「フランス法の火術」について教示している<sup>14)</sup>。象山はこれまでの砲術とは異なり「格別の事」と驚倒しているが、オランダ経由の情報が蘭学者仲間から入ったのであろうか。別のルートがあったのであろうか。

岩根寛三郎

この人物の出現する記事を『九鬼家年譜』から、要約して並べてみる。

文政十二年（1829） 郡奉行 岩根寛十郎（ママ）

天保四年（1833） 知行録に岩根寛三郎 百石

天保八年（1837） 大塩平八郎の乱の余波として、山田騒動が起こり、岩根寛三郎の門弟たちが藩領の境に出動、警戒に当たる。

天保十三年（1842） 丹波にある藩の飛び地で悪行を重ねていた相撲取りたちを岩根寛三郎等が召し取る。

弘化三年（1846） 岩根寛三郎、郡代として宗門改めに当たる。

（1850） 郡代寺社奉行を兼任。

（1854） 上野ヶ原で洋式調練の号令。

右の記事で浮かび上がるのは、民政家としての姿と、武人としての姿である。岩根家は、寛保三年（1743）に新規に浪人から召し抱えられた砲術家の家柄である。一方で安永二年（1773）には、同じ初代が郡奉行兼寺社奉行兼丹波代官に任じられているから、行政家としての手腕もあつたらしい。江戸時代には、煙硝を製造するのに古民家の床下の土を使っていたので、砲術家として農村周りをして世情に通じていた可能性もある。二代目に当たる岩根半之丞は町奉行にもなり、借用書を連発している。寛三郎は町奉行にはならなかったようだが、一般行政と治安対策で結構忙しそうである。砲術家として、有能な弟子を抱えていたこともわかる。

### 上野が原

現在の三田市旧市街地から見て北東の台地上にある。なだらかな高原状の松林に覆われた花崗岩質の土地で、江戸時代に開墾が試みられたが、水利がネックになりうまくいかなかったようだ。現在国立療養所や三田国際ゴルフ場の敷地になっている。緩やかな起伏の荒地のような場所であるから、訓練には打ってつけであったろう。ただし、これ以前にここで訓練をした記録は見つからない。わざわざ広くて人目に付かない場所を選んだと思われる。あるいは裏六甲での山岳戦を想定したものか。三田領では明和年間と明治の初めに大規模な一揆が起こっているが、いずれも集合場所は上野ヶ原である。

#### ③安政元年（1854）十二月の軍事演習の記録<sup>15)</sup>

上野ヶ原に於て御家中一統並びに無足の者迄、岩根寛三郎号令のもと洋式銃陣訓練が行われた。殿様も御共を従え野掛け（駆け）、夕刻に御帰館された。

#### ④文久元年（1861）の戦闘法改定の記録<sup>16)</sup>

三月二十一日 従来の三番侍組の戦闘法によらず、これからは「上野原抜隊竜訓練」と言う新様式の鉄砲訓練の戦闘法が採用されることになった。

「抜隊竜」は、英語の *battalion* と同じで「軍団」「大隊」を意味する。野口武彦の『江戸の兵学思想』によれば、高野長英も『三兵答知幾』で、この用語を「抜台竜」と表記している<sup>17)</sup>。

筆者は、この単語はオランダ語の音声表記だと素朴に信じていたが、オランダ語では *bataljon* であり、発音は英語に似て「バタリオン」である。これを「抜隊竜」と表記するのは、おかしいのではないだろうか。

フランス語では *bataillon* で、「バタイオン」と発音する。ところが、初級の学生も同じ間違いをよくするが、フランス語の発音規則を知らないと「バタイロン」と読んでしまう。このほうが「抜隊竜」に近いのではないだろうか。

フランス語の可能性を持ち出すのは、いくつか気になることがあるからだ。野口武彦によれば、鈴木春山の書物『三兵活法』に「バタヨン」という表記があるとのことである<sup>18)</sup>。この表記は、なぜか正確なフランス語の発音表記である。なぜ華山と同じ田原藩の、一介の医師にすぎぬ春山は、正確なフランス語の発音を知っていたのか。さきに名をあげた『弘郎察辞範』『和仏蘭対訳語林』でも、フランス語の発音表記はオランダ訛のでたらめなものであるにもかかわらず、岩下の指摘するように、西洋の兵法の随一であるナポレオンの兵法を研究しようという気運が、蘭学者の間に高まっていたなら、何かのついででフランス語を学ぼうとする人間が出てこない方が不思議である。ただ、そのついでの見当がまったく付かない。「仏国新聞紙」と同じように、「バタヨン」も唐突である。しかし無視することはできないだろう。

その「バタヨン」の読み間違いから、「抜隊竜」が生まれたのではないか。急死した春山の後を次いで『三兵答知幾』を完成させた高野長英の表記を調べてみると、『知彼一助』で、*escadron* と *Toulon* の *-ron*、*-lon* の部分に「竜」を使っている<sup>19)</sup>。また野口からの孫引きになるが、福地桜痴の『那破倫兵法』には堂々と「バタイロン」と書いてあるそうだ<sup>20)</sup>。フランス人と接してい

たはずの維新前後の幕臣にしてこうならば、化政から天保にかけての蘭学者がフランス語を間違えたとしても当然である。

もちろんオランダ語からの移植である可能性の方も残る。強そうな漢字表記を選んだことも考えられるし、音韻上の理由も考えられる。平城京の羅生門のあった場所には、「来世橋」がある。これは「らしょう」が「らいしょう」に転訛し、「来生」から「来世」になったといわれている。「バタリオン」が「バタイリオン」に転訛したと想定しても音韻転訛法則上の根拠はあるといえる。識者の判断を待ちたい。

「上野原」とわざわざ記されていることから、新たに蘭学者から習った訓練ではなく、昔から上野ヶ原で実践していた「あの演習」だという認識が、藩士たちにあったことは確実である。つまり岩根寛三郎が苦心して手がけてきた戦闘法である。洋式の戦闘法の採用例としては、きわめて早い。周知のように長州、大垣、福井そして幕府も長州戦争前後に軍の近代化を推進しており、三田藩の洋式化も、その流れの中で理解されがちであったが、文久元年に制定された軍法に「昔からやっている、あの上野ヶ原の」という冠がついている。この記事だけからも九鬼家が、異例な早さで軍隊の洋式化に取り組んでいたことは疑えない。

以上の資料から言えることは、まず九鬼家が文政年間にフランスの軍事情報を入手しているということである。幕府から泉州への出兵を命じられたにもかかわらず、その情報を理由に、外国の軍隊が大坂を攻撃したら帰れなくなる、神戸から上陸し六甲山を越えて丹波路から京都に侵入する可能性もあるという理由で、三田に近い地域の防備に当たりたいと申し出ている。今考えると、フランスやイギリスの軍隊が六甲越えて京都を目指すとは考えにくい、この発想の裏には、源義経の一ノ谷攻めの伝説があると思える。その奇襲攻撃のコースを逆にたどれば、京都に奇襲をかけることもできるというのは、それなりに筋の通った見解であろう。江戸時代の兵学は、過去の合戦の神話化と再解釈によって成り立っていたところがある。義経の奇襲攻撃は大日本帝国陸海軍まで手本にしているから、侍たちが意識したとしても当然である。九鬼家では、手持ちの情報を元にある程度作戦を検討して、自らの実力も考え、六甲筋の警備を主要任務にするよう決定していたと思える。幕府も三田藩がこの情報を得て準備に入っていることは知っているし、理由を立てて持ち場変更を申し出れば、幕府は聞き届けてくれると藩も思っている。実は十年後の天保七年（1836）、九鬼家は再び泉州出動を打診されている。しかし実際に泉州まで出張した記録はない。三田藩にフランスについての情報を与えたのは、幕府であると断定してよいのではないだろうか。

ここに出てくる「仏国新聞紙」の正体は判明していない。長崎の幕府関係者が本当にフランスの新聞紙をオランダ船から入手して、その情報が通事から幕府を経て三田に流れたのか。あるいは、『仏林新聞』という冊子なのか。いずれにしろ、資料を幕府が供与したと考えられる。そしてその資料を解説検討できるスタッフを九鬼家は擁していた。

そのスタッフの一端が伺えるのが、②の記事である。侍大将としてフランス語で号令をかけた岩根寛三郎という人物は、必ずどこかでフランス語を学んでいるはずだ。岩根寛三郎は元来砲術家であるから、銃隊を主体とする訓練を指揮する能力は持っていたと思われる。しかし行政担当者いきなり侍大将として異国の言葉で采配を振らせるというのは異様であり、主君、その背後

の幕府の意向がなければ、不可能であったはずだ。そして家臣団も、岩根のフランス語の研究の必要性は熟知しており、納得の上で調練に参加していたはずである。砲術家というのはある意味で、当時のハイ・テクのエンジニアであり、最新技術や情報を積極的に研究する素質があっただろうことは疑えない。なお岩根家の砲術はその後も健在で、幕末の当主（養子）岩根静造は高島流砲術を学び免許皆伝を受けている。<sup>21)</sup>

その調練が無駄でなかったことは、③の記事で伺える。この前年にペリーが来航しており、九鬼家は大砲を引きずり、浦賀に大挙出動している。翌年は、ロシア船の大阪湾侵入に際して、現在の阪神間の海岸に出動、尼崎の松平家と協調して警備に当たった。その年末に、主君の参加も得て同じ調練を行ったことは、一家をあげてフランス式戦闘法の価値を再認識したことになる（たとえば尼崎藩との比較で）。

それが明らかになるのが最後の記事である。旧来の戦闘法を捨てて「上野原抜隊竜調練」に全面的に切り替えるという決断を下したわけだが、その新戦闘法は岩根寛三郎苦心の作に間違いはない。

ここで幕府とフランス語との関わりを整理しておく。文化四年（1807）にロシアの日本遠征隊が択捉島を襲撃した際にフランス語の文書を残し、それを幕府が入手したことが、フランス語研究の始まりに結びつく。長崎のオランダ通詞たちが、フランス語の習得を幕府から許可され、本木庄左衛門を中心にグループができ、オランダ商館長のドゥッフを教師として学習が始まった。ところが翌年フェートン号事件が起こり、英語優先が命じられた。英語研究が一段落した文化十一年（1814）以降、再びフランス語に力が割かれて、『弘郎察辞範』が成立したと見られる。ところがこの辞典も、刊行されず稿本として本木家に残されたらしい。それと相前後して『和仏蘭対訳語林』という会話教本も成立したらしいが、これも序文も編者の名もない稿本として本木家に秘蔵されたといわれる。

この試み以降、幕末に村上英俊がフランス語を独学で会得するまで、日本のフランス学は空白とされてきた。しかしナポレオンの戦争をはじめ、ヨーロッパ情勢に対する関心は在野でも強かったし、幕府はフランス語がヨーロッパの外交用語であることも承知していた。全くの空白状態が続いたというのは、かえって不自然な見方ではないだろうか。それらのフランス語辞書は、本当に「死蔵」されたのだろうか。

以上のような資料から、以下の仮説を立ててみたい。文化文政の頃から、あるいはその前から、幕府の了解や指示のもとで三田家中では、フランスに関する軍事情報を収集分析していた。そして有能な人材にフランス語を学習させ、実際に戦闘能力を試験していた。その背後には、外交用語としてのフランス語と、長崎から入る西欧情勢の変化に関する情報への幕府の関心が存在していた。

## 第二章 三田九鬼家の家風

主に高田氏の『九鬼家年譜』によって、九鬼家の歴史を概観しておこう。

### 元禄まで

紀伊から志摩にかけての小豪族であった九鬼家は、嘉隆の代に北畠家の滅亡に乗じて戦国大名として自立する。織田信長の水軍を率いて鉄船で毛利水軍を撃破し、一向一揆との戦い、北条討伐でも活躍し武名をあげた。秀吉の朝鮮侵略でも水軍を任されるが、小大名故に、陸戦しか知らない大大名たちの連合軍の統率をとることが出来ず、すぐに任を解かれている。このときに徳川家康との間に確執を生じ、隠居の身ながら関ヶ原の戦いに際しては西軍に属し敗れて自刃した。長子の守隆は最初から徳川に属し、西軍の水軍を撃破した功を認められ、本領を安堵された。その後の大阪の陣でも水軍を率いて力戦し、志摩伊勢五万六千石を領した。

その守隆の没後、病弱な長兄の養子となった末弟久隆と、庶兄隆季の間でお家騒動が起り、寛永十年（1633）九鬼久隆が三田三万六千石、九鬼隆季が綾部二万石に分割転封される。大名廃絶を容赦なく行った家光のもとでは、非常に寛大な措置といえる。婚姻関係から見ても、当時すでに九鬼家は譜代に準ずるような特殊な位置にあったと思われる。この点、外様ながら一家の分裂を経て譜代並に扱われた真田家と類似している。三田第一代久隆の正室は本多因幡守の息女、第二代の隆昌の正室は池田輝澄の息女、第三代隆律は松平相模守三男が養子に入り、第四代副隆は柳生宗春の次男から養子に入った。本多某、松平某に関してはいずれも未詳ながら、いずれ徳川家とは深い関わりがある家であろう。池田本家は松平の姓を賜り、柳生家は周知のように將軍家兵法指南役である。

この副隆は、元禄四年六月、満十七歳の時に五代將軍綱吉から特に召され、奥詰めを仰せつかっている。將軍の奥小姓である。兄柳生俊方も剣術指南役、後に奥小姓となり、兄弟そろって將軍に近侍し愛顧を被ったことになる。副隆は、広大な上屋敷、下屋敷を江戸城近くに賜るなど、厚遇を受けるが、痔疾などの病に苦しみ二十四歳で亡くなっている。この跡を継いだ隆方も柳生家からの養子であり、また奥小姓を仰せつかった。ある意味で絶対君主的な綱吉のもとで、三田九鬼家が「宮廷貴族」化しつつあったことがわかる。またここに至るまでの当主は歴代早死にであり、一門のお歴々は没落、または退転し、藩政の実権は在地の家老以下家臣団に移っていた。家老と言っても、四百石程度の家禄にすぎない。

江戸では貴族のように振る舞っていた三田九鬼家だが、領地では陸に上がった河童の不幸を託ち続けていたようである。三田盆地は海から遠いのだが、城下の池や川で水練を繰り返し、冬にも足袋をはかず海に帰る日に備えていたという。在地の家臣団には、資料に名前が出た赤林家のように現地採用の者、岩根家のように浪人から新規召し抱えのものもいたが、多くは志摩以来の家柄である。しかし中でも高禄のものは、嫌気がさして浪人になる例が多く、比較的身分の低いものが残って領地を守っていた。彼らにしても土着の意識は薄かった。小藩ということもあるが、殖産興業に努めた形跡もない。幕末の三田青磁のように一発大ヒットの例もあるが、これも根付いたわけではなく、明治半ばまで細々と続いて止んでいる。経済政策としては、大阪で藩札を器用に回転させ、領地ではひたすら儉約に努めたようである。農工業の振興により領地を発展させるというよりは、とりあえず投資や借入れの繰り返しで金を融通し、家臣団うちそろって海に帰る日に備えるというのが藩の構えだったのであろう。主君の「宮廷貴族化」と、陸になじむことのない家臣団の団結が、独特の家風を作ったように思える。福沢諭吉に私淑する主君に率いられて集団で神戸に出て、そのまま貿易会社になってしまうといった奇妙な運命を選んだ藩は、それ

なりの歴史を持っている。

### 八代九鬼隆邑

九鬼家は、奇妙に物事に打ち込む人間を生んでいる。綾部から三田に養子に入った八代隆邑は、兵法者として中里介山の『日本武術神妙記』に名を留めている。彼は柔術からこの道に入り、三十歳の時、柳生新陰流免許皆伝を受けた。当時の江戸柳生家の剣の実力ははなはだ心許ないし、三田九鬼家と柳生家との関係を考えれば、身内に対する甘い評価はあったかもしれないが、とにかく百年ぶりの免許皆伝だったことに間違いはない。介山によれば、隆邑はとにかく強かったようである。

### 九鬼長門守

摂州三田の城主九鬼長門守は柳生家の高弟であったが、同門で免許を受けたものと勝負をして見るに長門守を打つ人は一人もなかったが長門守の打ち出す太刀は必ず中った、どうかすると長門守が、

「今の太刀は来たぞ」

と申されることがあるけれども、それは飾り言葉でこちらの太刀が中ったとは思われなかったそうである。

上の好むところによって、三田には剣術の芸能の士が多かった、中に一人の異人があって、一人行厨を腰につけて深山に入ることを好んでいたが、或日また山に入って千仞の絶壁の上に坐り、握り飯を取り出して食べていると、空から一つの鷲が来てその食物を掴み取ろうとする、右の侍これを見て、抜き打ちに丁と斬ると片翼を打ち落し羽は岩の上に止まり鷲は谷底に落ちた、その羽を取って帰宅したということである。

また三田には町の真中に或る部落の者の剣術稽古場まであって盛んに稽古を人に見せていたということである、もってその盛んなことを知るべしである。<sup>22)</sup>

ユニークな社会主義思想家であった介山らしく、被差別部落で武芸に励んでいたことを特記している。剣術以外にも隆邑は、若いときに柔術の修行に薩摩まで行ったとか、途方もない武勇伝に事欠かず、よほど頑丈な体質だったのか、三田に隠居の後も、孫の参勤に同行して江戸に遊んだり、力士を引き連れて綾部に乗り込み相撲大会を開いたり、楽しげに九十四歳まで生きている。

松浦静山の『甲子夜話』に次の記事がある。

隆邑は長門守、天明五年致仕。剃髮号松翁。徳廟に仕ふ。卒年九十。晩歳尚武伎（ママ）を能す。予も面染の人なり。<sup>23)</sup>

ほぼ同じ天明から化政期の綾部の当主九鬼隆度は、対照的に狂歌に打ち込み、大名の身でありながら鹿津部真顔の弟子となり、一派を率いて判者となっている。<sup>24)</sup>綾部九鬼家には、身分などに頓着せずに、好きなことに没頭する性格が遺伝していたようである。例の岩根寛三郎の先祖を召し抱えたのも、この武人大名の隆邑であった。彼によって、三田九鬼家は単なる準譜代大名では

ない、武辺としての家風を復活させたようである。

### 十代九鬼隆国

「宮廷貴族」としての三田九鬼家と、凝り性の綾部九鬼家の血が結晶したとも見えるのが、隆国（1781-1852）である。彼は容貌が美しく、教養が豊かで、談論風発、白河侯、真田侯などと昵懇で、ついには柳の間に席を持つ外様の小藩でありながら、文政十年（1827）御奏者番を仰せつかり、焼亡した西の丸御殿の再建に尽瘁した功により十万石城持ち格を許された。小身の外様大名としては、破格の扱いといってよい。フランス関係の記録は、いずれも彼の治世に関わっている。

御奏者番は、譜代大名から二十人程度が選ばれ、大名が將軍に謁するときに取り次ぎをしたり、大名が江戸に参勤したときに上使を勤めた。「言語伶俐英邁の仁にあらざれば堪えず」と『明良帯録』に言われている<sup>25)</sup>。寺社奉行から老中への出世コースの関門でもあり、江戸時代を通じて、柳の間から御奏者番に選任された者は、わずかである。オランダ商館長が江戸に参府し將軍が謁見するときも、そばに立ち会っている。

柴野栗山に朱子学を学び、白河侯、大洲侯、小田原侯とは学友として親しんだ。上は將軍執政より、下は町人まで交誼を尽くして交際したというが、おかげで藩財政は火の車で、儉約令や臨時課税令が立て続けに出ている。特に西の丸の再建工事では、普請手伝いを勤めた上に六千両を献上して賞賛されているが、当時の藩財政を考えると、このような大金がどう捻出できたのか不思議である。その功績で名目だけの十万石城持ち格を認められたのだから、今から見れば高い買い物である。隆国は蜂須賀侯の息女を正室に迎え、男子八人、女子九人の子福者でもあった。

隆国と同時期に御奏者番を勤めた人物としては、太田資始、土井利位、脇坂安董、間部詮勝など、後に老中に榮進する錚々たる面々が並んでおり、その中に加わっているだけで立派ではあるが、その中に混じると一段の出世は難しかったであろう。

松浦静山（清）の『甲子夜話』には、静山、隆国、それに備前新田の池田内匠頭、大洲の加藤右衛門佐の四人で、柳の間の綱紀肅正のために盟約を結んだという逸話が紹介されている。静山が江戸に参勤するようになった頃、柳の間はえこひいきをする森、池田という二人の大名の偏った支配のもとにあった。そのうち彼らが引退させられ、次のリーダーが待望されることになる。そこでの話である。

されどもこの頃は、上には白河、吉田の両侯等、皆予が近縁にして、且清明の世なりしかば、予が忠誠の志も行はれ、私邪の風も自から遠ざかれる俗ともなれる。この頃、予が近席に加藤遠州、九鬼泉州、池田内匠頭、予と四人、窃に志を興し盟を為せしを、遠州は固、内匠は柔、泉州は自立の気有りしが、予は遂に剛を以て失し、又病に依て隠倫に墜たり。然るに内匠は早く没し、遠州も中年に及んで卒し、ただ泉州独り其志を得て、今官辺に仕る身とはなれり。<sup>26)</sup>

静山は次のような人物評も下している。

又九鬼泉州は、始め仙次郎と呼て、前髪にて出勤し、森氏に就て進退せしが、森柳班を去りてよ

り、予に就て勤事す。其頃は叙爵して和泉守と称せり。其質沈志有て、柔順人と和す。亦多芸なり。然して予と交友し、赤心報国を以て務となす。予不肖、聊か慍る所有て、疾を称して骸骨を乞ふ。因て九鬼首謀の身となり、尋で柳班を出て、奏官に升る。其本予が薫力に依ると雖も、亦其人赤報の志<sup>27)</sup>に由れり。

静山が松浦家の家督を相続したのが安永四年（1775）、剃髮隠居したのが文化三年（1806）、隆国が家督相続したのが寛政十年（1798）であるから、柳の間で肩を並べていた時期は意外に短い。隆国が二十歳以上年少である。政治家・文人として優れた事績を残す静山から長く信頼され、その人柄を絶賛されていることは興味深い。しかも隆国の出世は、もともと私の力なんだと一言断っているのが面白い。

松浦家は、江戸初期まで世界に向かって開かれた窓であった平戸に城を構え、外様ながら寺社奉行を出し、静山の代には大胆な藩政改革を行い、幕末には軍隊を銃中心に再編成し、戊申戦争直前に倒幕側に加わっている。すくなくならず、その後のあゆみが、互いに似ているのは興味深い。これは偶然であろうか。さらに両藩の関係を調査する必要がある。

以上のような幕府内部での高い評価に加え、三田に藩校造士館を設立し文武を奨励し、藩医の遺児であった川本幸民を取り立てて保護したことが、歴史的には大きな功績であろう。

次の十一代隆徳は、ペリーの来航騒動を機会に隠居し、後を託された十二代精隆は幕末の慌ただしさに巻き込まれたように三十六歳で急死する。嫡子なく、急拠綾部から十三代隆義が養子に入っている。若い主君のもとで白州退蔵を中心とする改革派が台頭し、軍の洋式化が急速に進められることになる。安政元年の大坂出兵に際しては、まだ太鼓にホラ貝を合図に使い、「異賊共上陸致し合戦、討ち取り候首実検相済候後その場に竿掛け渡し晒し置くべく心得のこと」など古色蒼然とした通達が出されていたが、六年後の万延元年には、藩士は小銃隊として再編成され、その翌年の「上野原抜隊竜調練」戦闘法の正式採用に至る。軍制だけではなく、藩政の一新を敢行、儒者であった白州の専制体制をこしらえあげる。川本幸民の進言で大量のナアルトゲール銃を購入し、その資金を捻出するために藩士に鎧甲を売却させた。慶応三年の九月に、また上野ヶ原で調練をしているが、今回はイギリス流調練だと記されている。一時薩摩藩に身を置いた川本幸民のアドバイスでもあったか、直接イギリスから移入された戦闘法が採用されたと考えられる。洋服を着て、笛と太鼓で合図をするという本格的なもので、二百人の演習に見物人が千人も集まったという。

大政奉還にあたっては、三代將軍の御恩に報いるとして断固幕府の側に立った隆義であったが、三田から駆けつけてきた白州に擁されて泣く泣く三田にかえり、新政府に属した。スナイドル銃を標準装備し、大坂や京都の警備に当たるとともに、新政府に廃刀令の実施、封建制の廃止、郡県制の施行などを進言して、変人扱いされた。三田の片田舎まで学校を組織し、洋学教育に努め、明治四年には一藩帰田を願い出、華族・士族制の廃止、国民議会の開設などを主張、民権華族の名を取る。キリスト教にも理解があり、阪神間の教会の設立に力を貸した。一方で資金捻出のため苛斂誅求に走り、江戸時代にもなかったような大規模な一揆を招いている。

以上が江戸時代を通じての九鬼家の来歴であるが、戦国大名から將軍の側近へと転身した元祿

までの過程、そして武芸と学問を奨励し人材登用を計った享保から化政まで、そして時勢を機敏に判断して洋式導入に動いた幕末の時代と、それぞれ歴史の流れによく対応している感がある。

第一期では、柳生家との強い結びつきが際だつ。久隆の息女が柳生家に嫁いだ関係で、二代にわたって、柳生家から養子を迎えている。柳生家は將軍の剣術指南であるが、綱吉の例にあるように、「それ以上の関係」になることもあったようだ。家光と柳生家に関わる男色の噂に関しては、五味康祐や隆慶一郎が小説に取り上げている。<sup>29)</sup>その後柳生家は、三十年以上にわたって勘定奉行を勤めた久通のような人物を出しているが、両家の関係がその後も絶えなかったことは、隆邑の柳生流免許皆伝の事実が示している。將軍家の官僚となった柳生家とのつながりが、譜代並の扱いをさらに手厚いものとした事は確かであろう。

第二期の改革の時代は、隆邑と隆国に代表される。静山が記しているとおおり、隆邑は武人として有名で、その影響から藩をあげて尚武の気風が起こったことは前述した。その藩風一新が隆国に結実し、幕府の中樞にまで登り詰め、十万石城主格を許されるに至る。藩内では一門も全く家臣化し、幕府で名声を高める藩主の指示のもと、一致団結して事に当たる体制が確立していた。

第三期は、隆義の働きがめざましい。異様な早さの洋式導入がたいした抵抗もなく実現していることは、先に見たとおりである。

筆者は、この第二期と第三期を一連の流れと考えることができている。以下、その流れがどのようなものであったかの仮説を述べてみたい。

### 第三章 三田九鬼家を巡る仮説

#### 「寛政の改革」グループとの関係

まず注目したいのは、隆国と松平定信との関係である。中里介山は、定信の柔術修行に関して、「三田侯」の指導があったように述べている。

松平定信は起倒流鈴木清兵衛邦教に柔術を学び諸武術の中殊に心力を尽くして研究した。初め朋友の中、津侯、三田侯等が鈴木清兵衛の勝れたる事を定信に吹聴し、人の上に立つ者が学んで修身の助けとなる事少くないと再三勧めたのだけれども……<sup>30)</sup>

隠居の隆邑は定信より三十歳の年長、当主の隆国はおよそ二十歳の年少、この二人が柔術の達人と伝えられている。間に隆張という人物がいるが、柔術を学んだという記述がない。この人物は、長命の父親と輝かしい息子に挟まれ、中年になってから家督を継ぎ、さっさと隠居している影の薄い人物である。よって定信が若くして柔術を始めたなら、「三田侯」は隆邑、老中をやめた後に打ち込んだのなら、隆国（襲封寛政十年（1798））になる。介山の記事の最後に、「退職の頃は清兵衛の嫡子や杉山七左衛門を呼び、その後は水野若狭を相手として互に研究し終身怠る事なかった」とある。この「退職」を老中引退のことと考えると寛政五年（1793）、隠居のことと考えると文化九年（1812）である。武張ったことが好きな定信が、武人として高名な隆邑と接触しても不思議はない。隆国も定信と親しかったことは確実であるから、九鬼家は三代にわたって松

平定信と親近していた可能性もある。

一方で、隆国が師事した柴野栗山は、定信がもっとも高く評価し、京都御所再建や「寛政異学の禁」にあたって顧問格に据えた儒学者である。文武の両面にわたって、定信と隆国は堅く結ばれている。

さらに、隆国を絶賛し盟約を結んだ松浦静山は、定信と縁戚関係にあった。静山の三男で家督を継いだ熙の正室は、定信の息女である。『甲子夜話』では、定信に対する尊敬の念が繰り返し語られている。さらに静山の叔母（彼は祖父の養子になったので戸籍上は妹）は、定信の「信友」である本多忠籌の正室であり、静山自身の正室は、同じく定信の「信友」である松平信明の妹である。定信引退後に「寛政の遺老」として改革路線を継続した大物二人とも、堅く婚姻関係で結ばれているのがわかる。先に隆国の人物評のために引用した箇所でも、「近縁」である「白河侯、吉田侯」を清明な政治を指導した人物として高く評価しているが、この「吉田侯」が松平信明のことである。自らも平戸藩で「寛政の改革」を実践した松浦静山は、寛政の改革派の青年将校のような位置にあったのであり、家慶を守り、家斉の大御所政治の前に立ちはだかるべき使命を帯びていた。『甲子夜話』を見ると、彼が政治的に憤死した後、唯一後を託すべき人物と見えたのが、九鬼隆国であったことがよくわかる。いわば寛政の改革の最後の希望と見なされていたことになる。

それにしては西の丸の再建工事では、助役を務めた上に六千両を大御所家斉に献上するという大変な献身を実行しているが、水野忠邦も出世のために手段を選ばず賄賂を使ったことでとかくの噂になった人物である。それに比べれば、隆国の家斉への献身ぶりは公明正大と言えるのではないだろうか。西の丸再建の功績で、十万石城主格を得た後も、静山とのつき合いは変わっていないから、「首謀の身」の隆国をさらに幕府中枢で昇格させるために、何かの策略があったのかもしれない。

大石慎三郎は、「寛政の改革」を、側用人出身の田沼意次に対する門閥派のテロとクーデターをすら呼んでいる<sup>31)</sup>。フランス史の知識を少しは持っているものにとって、田沼はリシュリューやマザランと、門閥派はフロンドの貴族連合とどぶって見えてくる。田沼の側用人政治は、旗本・御家人から人材を起用した將軍独裁政治を目指し、門閥派は親藩・譜代大名から人材を登用し、合議制による政策づくりを目指しているように見える。フランスのように事が進めば、旗本・御家人が、絶対王政の官僚である「法服貴族」のような存在となって、將軍独裁体制ができていたかもしれない。イギリスのようになれば、中小大名が合議制の議會を作り、産業者化していったかもしれない。どちらにもならなかったのは、強大な外様大名が、まったく政権参加への道を閉ざされていたからであり、幕府の政治は側用人政治と門閥政治の間を振り子のように揺れ続け、最終的に、排除され続けた薩長の圧力の前に崩壊したといえる。幕末の、紀伊派と水戸・一橋派との抗争が最後の決戦といえるが、そのときすでにイニシアティブは薩長に握られていた<sup>32)</sup>。

門閥合議派は、旗本・御家人から人材をリクルートするわけには行かない。それよりは日の当たらない所に押し込められているが、鬱勃たる野心を抱いている小身の外様大名に、人材を捜し求めるだろう。柳の間から幕府中枢に入った、松浦家、真田家、脇坂家、亀井家などの外様大名と同列に、九鬼家もそういう期待を担っていたということである。むしろ、あるいは門閥派と改革派の中間に、しがらみにとられない外様の小大名が積極的に入り込んでいったといえるのか

もしれない。これら小大名は当然佐幕派として明治維新の動乱の中で木っ端微塵になり、その実績が伝わらなかった。その再評価が必要だと思える。彼らの限界は、隆国が典型だが、幕府内で能力を認められ立身することを至上の課題としていたことであろう。幕藩体制を越える新しい社会を構想できなかったがゆえに、先進的な政策を採りながら、歴史の中に埋没してしまったのである。

当時の幕府が緊急に解決すべき問題、差し迫っているが、門閥のお歴々には解決不可能な問題のひとつが、外国との交渉であった。そのために幕府が長崎通詞たちに大号令をかけ、諸国語と外国事情を研究させていたことは周知である。林子平や渡辺華山への弾圧にしても、不正確な情報の無秩序な流通を嫌ったためであり、長崎通詞たちの大奮闘を見ると、決して幕府が因循姑息だったわけではないことがわかる。事実在野の蘭学者たちの外国情報には、華山における「モリソン」の説明などを筆頭に、基本的な誤りが多いのである。『国書人名辞典』（岩波書店）で定信の著作目録を見ると、『ペーブル之和解』という奇妙なタイトルの著作が見つかる。筆者浅学にして、今のところ内容は未確認だが、蘭学の書物であることは確かだろう。ご教示を待つ。

ここで再び松浦静山と九鬼隆国との関係に注目したい。というのは、松浦静山は、阿片戦争に猛烈な興味を示していることからわかるように、海外からのニュースにきわめて敏感であった。そして平戸藩は長崎に「長崎聞役」を置いて、長崎での最新情報の入手に努めていたのである。長崎から平戸へ、平戸から江戸へ、江戸から三田へと言う情報ルートが想定できる。さらに静山は林大学頭と親しかったが、林家は代々幕府の外交顧問のような立場にあった。長崎からの情報を持ちうる立場にある二人が、国際情勢を語り合うこともあったのではないだろうか。そして「首謀の身」である九鬼家に、その内容が伝わることも十分考えられる。隠居した静山が、ただ一人後事を託すに足る人物と認めた大名が隆国であった。そこにフランスから三田への、一筋の糸が見いだされる。その背後には、定信の遺志を継ぐ「合議派」が存在したのではないか。

#### 佐久間象山と村上英俊から

一方で定信の子息が、やはり外様の真田家に養子にはいる。中興の英主と称えられ、老中にも上る幸貫であるが、その引き立てによって世に出たのが、ナポレオンの心酔者でもある佐久間象山、その象山に勧められてフランス語を苦心の末独力で学んだのが、日本フランス学の開祖と言われる村上英俊である。オランダ語のつもりでベルセリウスの『化学提要』を注文したら、フランス語の本が来たので、フランス語の学習を始めたという記述が英俊の伝記にあるが、あまりに不自然かつ不合理であるという批判が早く出ている。富田仁がその論点を紹介している。<sup>33)</sup>

まず一介の藩医である英俊に、オランダへ本を発注することができたか。そしてその代金を払うことができたか。藩で払ったならあるはずの書類が見つからない。入手までの時間も、伝記では短すぎる。1834年にベルセリウスのオランダ語訳が出ているのに、なぜフランス語訳を頼んだのか。しかも『化学提要』は三千ページを越える大著であり、化学の知識もなくフランス語も知らない英俊に、それが読みこなせたとは思えない。これらの批判を否定することは困難と思われる。ドイツ語も物理学も知らない素人が、相対性理論を勉強としようとして、いきなりアインシュタインのドイツ語の論文を読んで難解さに泣くというのは、いくらなんでも変である。

宮永孝は英俊の伝記ではなく、象山の伝記から、日本フランス学の始まりを検証している。と

ころがここでまた三田関係者が出てくるのである。

嘉永元年（1848）ごろ、英俊ははじめて化学の学習を志し、象山を介して川本幸民が所蔵する J. Berzelius の化学書を借りようとした。このとき象山は「余近日吾が公に請ひて仏文化学書数種を購へり。子盍そ之を読まざると」といった<sup>34)</sup>。

この「吾が公」が真田幸貫である。宮永は、真田家家老の遺文から、象山が幸貫から内々の命を受け、フランス語の学習をしようとしたが、手に余ったので英俊におはちを回したのではないかと推測している。確認しておくが、定信の息子が家来に、秘密裏にフランス語の研究を命じたのである。しかもそこに川本幸民が絡んでいる。

不審なことがある。宮永も引用している英俊の『仏語明要』凡例中の文章である。

嘉永元年五月初テ。仏蘭西文典ヲ取りテ。之ヲ閲スルコト。五閏月。聊カ文法ヲ知ル。故ニ更ニ。別爾撰律私ノ著書ヲ取りテ。之ヲ閲スルニ。一行ヲモ読コト能ハス。

ここで「別爾撰律私」とあるのは、宮永も推定しているとおり、ベルセリウスであろう。異説があるようだが、他の読み方は考えられない。ベルセリウスはスウェーデンの科学者で、近代の化学の発展に偉大な寄与をした人物である。整理してみる。

- ① 英俊は、ベルセリウスの本を読みたくて象山を介して、川本幸民から借りようとした。
- ② ところが象山は、フランス語の化学書が買ってあるから、勉強してみないかと言った。
- ③ そこで象山の貸してくれた本を懸命に学習したものの、半年近くたってベルセリウスを開いてみても、全く理解できなかった。

やはり、ここでも不自然なことになる。英俊の所持していた「ベルセリウス」はフランス語であった。では、その「ベルセリウス」はどこから来たのか。このフランス語訳「ベルセリウス」は、象山の提供した化学書だったのだろうか。象山の言葉は「ちょうどそれなら、買ってある」という発言ではなかったようだ。「ベルセリウス」を借りるなら、まずフランス語だよという、象山の言い方が気になる。借りようとした幸民所蔵の「ベルセリウス」がオランダ語であったなら、象山を介して写本を手に入れることは難しくはなく、蘭学者であった英俊は、何もフランス語の「ベルセリウス」を開いて、途方に暮れることはなかったのではないだろうか。対照すればすむことだ。英俊が途方に暮れたフランス語の「ベルセリウス」は、よって、幸民の蔵書そのものを借り受けたか、写本を借り受けたものであると想定できる。嘉永の初年なら、幸民は島津斉彬に仕え、『気海観瀾広義』を執筆していた時期である。斉彬なら、本邦初の科学概論を執筆しようとしていた幸民の求めに応じて、大著をオランダから取り寄せることができたはずである。

もうひとつ、英俊が勉強した「仏蘭西文典」も唐突の感を否めない。宮永は松代藩の書庫に、オランダ語で書かれたフランス語文典があったと推測しているが、妥当な見解だろう。真田家ではフランス語学習の準備はすでに整っており、人材だけが欠けていたのだ。

よって、次の理解が自然であろう。

- ① 英俊は化学を学ぼうとして、幸民が「ベルセリウス」という名著を所持していることを知

って借りようとした。オランダ語で書かれていると思ったか、フランス語でもオランダ語とたいして変わるまいと思っていた。

② 周旋を頼まれた象山は、「ベルセリウス」がフランス語であることを知っていた。自分がフランス語に歯が立たなかった経験から、まず簡単なフランス語文典から読まないかと誘った。本来それは、真田幸貫が象山に学ばせようと与えたものである。

③ 象山にそそのかされた英俊は、気安く取り組んだものの大変な苦勞をした。文典をマスターしたと思って、「ベルセリウス」の著書を開いたが、まったく理解できず困惑した。

ベルセリウス（1779-1848）は、ラヴォアジエの化学を更に発展させ、電気化学の基礎を築き、多くの元素を特定、原子記号の表記法を決めるなどを偉大な功績を残した学者である。そして主著の『化学提要』（*Lärbok i kemien*）は、1808年から1818年にかけて三回に分けてストックホルムで出版され、1829年から1833年にかけてフランス語に訳された。その直後にオランダ語に訳されたことになる。幸民の『気海観瀾広義』に、ベルセリウスの名前は、燃素説の否定者として登場している。<sup>35)</sup>しかし「ベルセリウス」と呼ばれる書物、つまりその主著たる『化学提要』に幸民が触れていたかどうかは、今のところ確認できない。しかし英俊のフランス語独学の事情を考え、次の仮説を提案しておきたい。「川本幸民はフランス語が理解できた。どこで学んだかはわからない。」

当然疑問が出てくる。たとえば幸民はフランス語の教授を行っていない。だが長崎通詞のグループは、前述の通り、英語もフランス語も学んでいた。馬場左十郎のように、語学の天才もいる。しかし、そのもとから弟子が育って活躍した形跡がない。それは幕府の情報統制策によるだろうし、重要な知識を、和算がそうであるように、極秘に伝承していく日本の慣習も働いているだろう。しかし何より、蘭学の研究を進め、幕臣として実際にフランス人と接触する機会もあった幸民は、自分の「フランス語」が山奥仕込みのあまりにすさまじい代物であることに気が付いて、表芸にする気が失せたのではないだろうか。幕府の崩壊とともに、幕臣となっていた幸民は三田に戻るが、そのとき教えたのは英語である。そこには幕府とフランス、薩長とイギリスの関係への配慮や、福沢諭吉に傾倒した主君からの要請が考えられる。幸民の生涯には、他の蘭学者とは違い、現在の軍事科学技術の開発に携わっている人物のように、よくわからないところが多く、どこか暗い印象がつきまとう。意図的に痕跡を抹殺された可能性もある。<sup>36)</sup>

以上取り留めもなく述べてきたが、筆者は、松平定信の「寛政の改革」グループが、異国船の接近と無能な大御所政治に危機感を抱き、極秘裏にフランス語研究を図っていたのではないかという仮説を抱くに至った。その背後には、ヨーロッパの外交言語としてのフランス語への関心と、ヨーロッパ最強と目されたナポレオン兵法への興味があった。象山は「夷俗を馭するには、先づ夷情を知るに如くはなし。夷情を知るには、先づ夷語に通ずるに如くはなし。<sup>37)</sup>故に夷語に通ずることは、ただ彼を知るの階梯たるのみならず、またこれ彼を馭するの先務なり<sup>37)</sup>」と述べている。まさにそのとおりのこと、語学研究、軍事情報の分析、技術開発が、国家危急の際を想定して、幕府の一部で早くから試みられていたのではないだろうか。そういうチームがあればこそ、在野の林子平や、尚齒会は弾圧されねばならなかったのではないか。<sup>38)</sup>

天保十二年の末に隆国は御奏者番を病によって辞任し、翌々年には家督を譲る。天保十二年は天保の改革が始まった年、松浦静山が亡くなった年である。盟友も世を去り、寛政の改革とは異質な改革が始まって、最後の「定信党」である隆国は、新しい世代の松代侯などの成長も見届けたくて、引退を決意したのだろう。

ところが天保十四年には、岩根寛三郎が侍大将となり、上野ヶ原でフランス語で号令をかけて軍事訓練をしている。九鬼家の侍たちは中央の動向に関わりなく、山間の僻地で黙々と主君の命令に従いフランス語を学び、兵法を研究していたのだ。

岩根寛三郎は、三田の佐久間象山というべき存在であった。ただし象山のように、壮士として大言壮語し、天下の情勢を論じつつ時流に身を投じようとしたのではない。日焼けした顔で、日焼けした羽織を着て、村々を回り、年貢を毛見し、急報を受けて駆けつけては乱暴者の捕縛にあたり、非番の日には鉄砲稽古に励み、家に帰って行灯のもとでフランス語の教本をめくっているような人物である。そして、そのそばに、近所に住む医者の子息が正座して耳を傾けていたのではないかという、懐かしい空想をやめることができない。

## む す び

先日所用で香川県を訪れた際、久保栄左衛門（1780-1841）の業績を知ることができた<sup>39)</sup>。坂出塩田の開発と高松藩の財政再建で有名な栄左衛門は、それ以前は優れた砲術家であった。写真で知ったのみだが、大砲から空気銃、ゼンマイ式で発火する手のひらにはいるほどの拳銃などを、独力で設計制作している。彼は農家の出身で、瀬戸内航路の船乗りであった家族のつてを頼って、大坂でしばらく蘭学を勉強したにすぎない。しかし天文学の知識を評価されて、松平家から領地の測量を任されて以来、ロシア艦隊との戦闘法を工夫して建言したり、火薬を改良したり、銃器の開発にいそしみ、天保九年（1838）には雷汞を製造するのに成功している。定説である尾張の吉雄氏よりも三年早い。しかしそれらの品々は、先進的であるがゆえに藩主松平家に秘蔵されて、世に知られることはなかった。同じ讃岐の平賀源内などより、よほど有益で大規模な仕事であるにもかかわらず。

それらの業績は、製品の形で残るから、今でも偉容を目にすることができる。しかしその努力が「知識」に振り向けられていた場合、ましてやその「知識」が書物の形を取らなかった場合、その業績は後に残らない。「知識」は、まるで何もなかったかのように、その人とともに滅びてしまう。

筆者は岩根寛三郎や川本幸民の場合が、まさにそうだったのではないかと考えている。この論考は、非力な筆者が、まるで三田名物の冬の霧のように不透明な歴史の彼方に霞んでしまった人物の後ろ姿をかりうじて捕らえたような気がして、見えるところを必死につづったものにすぎない。まだ、それは蟹気楼かもしれないと言う気が筆者自身にもある。古文書の現物から、その立ち姿を再現できるところまでたどり着くのは容易ではないが、その影が見えている限りは追いかけてみようと思っている。

## 注

- 1) 昭和六十一年に『六甲タイムズ』連載。平成十一年六月私家版として刊行。
- 2) 平成二年に『六甲タイムズ』連載。平成八年に私家版として刊行。
- 3) 『福翁自伝』岩波文庫, 1978, p. 231.
- 4) 『九鬼家年譜』, p. 236.
- 5) 同上, p. 220.
- 6) 同上, p. 234.
- 7) 宮永 孝『日本史のなかのフランス語』白水社, 1998, p. 28.
- 8) 岩下哲典『江戸のナポレオン伝説』中公新書, 1999, p. 144.
- 9) 聞き書きは四月, 書状は九月である。
- 10) 寛文三年に赤林源右衛門召し抱え。後に丹波代官から銭奉行へ出世。
- 11) 『華山・長英論集』岩波文庫, 1978, p. 69.
- 12) 「杉本つとむ『蘭学に命をかけ申し候』皓星社, 1999, p. 302.
- 13) 『九鬼家年譜』, p. 251.
- 14) 加藤永谷宛書簡（天保十三年十月九日付け）『日本思想体系・第五十五巻』岩波書店, p. 327.
- 15) 『九鬼家年譜』, p. 279.
- 16) 『九鬼家年譜』, p. 294.
- 17) 野口武彦『江戸の兵学思想』中公文庫, 1999, p. 322.
- 18) 同上, p. 313.
- 19) 『華山・長英論集』, p. 268, p. 271.
- 20) 野口前掲書, p. 320.
- 21) 高田氏の御教示による。岩根家は宝塚で存続しているそうである。
- 22) 中里介山『日本武術神妙記』河出文庫, 昭和六十年, p. 168.
- 23) 『甲子夜話・三編 6』「卷九十四の十七話」平凡社東洋文庫, 1983, p. 168.
- 24) 『日本人名大辞典』（平凡社）の記述による。
- 25) 『官職要解』講談社学術文庫, p. 339.
- 26) 『甲子夜話・続編 8』「卷九十四の八話」東洋文庫, 1981, p. 155.
- 27) 『甲子夜話・三編 6』「卷六十九の十二話」, p. 70.
- 28) 『九鬼家年譜』, p. 280.
- 29) 五味の『柳生武芸帳』では宗冬が女装し, 隆の短編「寛永御前試合」では友矩と家光の男色が伏線となっている。
- 30) 介山前掲書, p. 131.
- 31) 大石慎三郎『田沼意次の時代』岩波書店, 1991, 第三章を参照。
- 32) 井伊直弼を史上最強の將軍独裁派, 水戸斉昭を門閥合議派の領袖と見なせないだろうか。また, その門閥グループに島津斉彬も含めると, 川本幸民が薩摩に拾われた理由もわかってくる。
- 33) 富田 仁『仏蘭西学のあけぼの』カルチャー出版, 1975, p. 166.
- 34) 宮永前掲書, p. 32.
- 35) 『日本科学古典全書』第六巻, 朝日新聞社, 昭和十七年, p. 168.
- 36) 幸民が「事に座して」藩を離れ薩摩に赴いた理由は, まったく不明である。また薩摩での行状も, 藩の秘密主義と, 斉彬派と久光派との抗争もあって史料が残っていないらしい。
- 37) 「省譽録」, 前掲『日本思想体系』, p. 251.
- 38) 江川太郎左衛門の父は, 定信の相模湾巡検に同行している。江川父子と定信, 斉昭との関係を考えてみると, 尚齒会弾圧は言われているのと別の政治性を持っていたのかもしれない。
- 39) 久保栄左衛門の事績については, 『引田町史』ぎょうせい, 平成七年刊を参照。